

心眼

三遊亭円朝

青空文庫

さてこれは外題げだいを心眼しんがんと申まうす心の眼めといふお話でござりますが、物の色を眼めで見まし
 ても、只赤たあかいのこうばい紅梅こうばいか木瓜ぼけの花か薔薇ばらか牡丹ぼたんか分わかりませんが、ハ、ア早咲はやぎきの牡丹ぼたんで
 あるなと心で受けませんと、五色しきも見分みわけが付きませんから、心眼しんがんと外題げだいを致いたしましたが、
 おほさかちやう大坂町おほさかちやうに梅喜ばいきと申まうす針医はりいがございましたが、療治れうちの方は極下手ごくへたで、病人はりに針はりを打ちま
 すと、それがためお腹なかが痛くなつたり、頭痛の所へ打ちますと却て天窓あたまが痛んだり致しま
 すので、あまり療治れうちを頼たのむ者はありません。すると横浜よこはまの懇意こんいな人が親切に横浜よこはまへ出で
 稼かせぎに来るが宜いい、然さうやつてゐては何時いつまでも貧乏してゐる事では成ならん、浜はまはまた鼯ひ
 いきつよとこゝろ眞強まづい処ところだからと云いつてくれましたので、当人たうにんも参る氣になりましたが、横浜よこはまへ参まゐ
 るには手曳てひきがないからと自分の弟の松之助まつのすけといふ者を連れまして横浜よこはまへまゐりまして、
 野毛のげの宅うちへ厄介やつかいになつて居をり、せめて半年か今年一年位稼ぐらゐいで歸かへつて来るだらうと、女に
 房ようばうも待つて居をりますと、直すくに三日目に歸かへつてまゐりました。鼻あたまの尖頭あたまへ汗をかき、天
 窓たまからポツポと煙けむを出けむし、門かどぐち口くちへ突立つつたなり物も云いひません。女房おや「おやお前まへお歸かへり
 か。梅「い……今歸かへつたよ。女房「おや何どうしたんだね、まア何どうも余あり早いぢやアない
 か、浜はまへ往いつて直すぐに歸かへつて來たの。梅「直すぐにたツて居あられねえもの、どうも幾許いくらゐ居た

くつても居られませんが、あまり馬鹿馬鹿しくつて口惜しいたツて口惜しくねえたツて耐らないもの……。と鼻息荒く思ふやうに口もきけん様子。女房「何うしたんだねえ、まア何だね。梅「何うしたつて、フン／＼あの松ノ畜生め……。女房「松さんが何うしたんだえ。梅「彼奴が、己を置去りにして先へ帰りやアがつたが、岩田屋さんは親切だから此方へ来な、浜は鼻肩強えから何でも来ねえと仰しやるので、他に手曳がねえから松を連れていくと、六畳の座敷を借切つてゐると、火鉢はここへ置くよ、烟草盆も置くよ、土瓶も貸してやる、水指もこゝに有るは、手水場へは此処から往くんだ、こゝへ布巾も掛けて置くよ、この戸棚に夜具蒲団もあるよと何から何まで残らず貸して下すつてよ、往つた当座だから療治はないや、退屈だらうと思つて岩田屋の御夫婦が来て、四方山の話をして居ると、松が傍で土瓶をひつくりかへして灰神樂を上げたから、氣を附ける、粗忽をするなつて他人さまの前だから小言も云はうぢやアねえか、すると彼奴が己にむかつ腹ア立つて、よく小言をいふ、兄振つたことを云ふな、己が手を曳いてやらなけりやア何処へも往かれめえ、御飯の世話から手水場へ往くまで己が附いてツてやるんだ、月給を取るんぢやアなし、何んぞと云ふと小言を云やアがる、兄もねえもんだ、兄(狸)の腹鼓が聞いて呆れると吐しやアがるから、やい此ノ畜生、手前は懶惰者でべん／

へと遊んでゐるから、何処へ奉公に遣つたつて置いてくれる者もないから、己が養つて置くからには、己の手を曳くぐらゐるは当然だ、何を云やアがるつて立上つて戸外へ出たが、己も眼が見えないから追掛けて出ても仕様はなし、あんな奴にまで馬鹿にされると腹を立つのを、岩田屋の御夫婦が心配して、なに松さんだつて家へ帰れば姉さんに小言を云はれるから、帰つて来るに違ひない、なに彼奴は銭を持つてゐる氣遣ひは有ませんか、停車場へ往つたつて切符を買ふ手当もありませんから、いまに帰りませうと待つたが、帰つて来ねえ、処で悪い顔もしず、御飯の世話から床の揚げ下しまで岩田屋さん御夫婦が為て下さるんだが、宜い氣になつて其様なことがさせられるかさせられねえか考へて見ねえ、とてもそれなりに世話に成つてもゐられねえから帰つて来たのよ。女房「本當に困るぢやアないかね、私も義理ある間だから小言も云へないが、たつた一人の兄さんを置き去りにして帰つて来るなんて……なに屹度早晩にぶらりと帰つて来るのが落だらうが、臆腹が立つたらうね。梅「腹が立つたつて立たねえツてえ、詰らねえ事を腹ア立てやアがつて、たつた一人の血を分けた兄の己を置き去りにしやアがつてよ、是れと云ふのも己の眼が悪いばかりだ、あゝ口惜しい、何うかしてお竹や切めて此の眼を片方でも宜いから明けてくんよ。女房「明けてくんなど云つて、私ア医者ぢやアなし、そんな無理なこと

を云つたツて私がお前の眼を明る訳にはいらないが、苦しい時の神頼みてえ事も有るから、二人で信心をして、一生懸命になつたら、また良いお医者に出会ふことも有らうから、夫婦で茅場町の薬師さまへ信心をして、三七、二十一日断食をして、夜中参りをしたら宜からう。と是から一生懸命に信心を始めました。すると一心が通りましてか、満願の日に梅喜は疲れ果て、賽銭箱の傍へ打倒れてしまふ中に、カア／＼と黎明告る鳥諸共に白々と夜が明け離れますと、誰やらん傍へ来て頻りに揺り起すものが有ります。×「梅喜さん／＼、こんな処に寐て居ちやアいけないよ、風え引くよ……。梅「はい／＼……。眼を擦り此方を見る」×「おや……。お前眼が開いたぜ。梅「へえ／＼……。成程……。是は……。あ、（両手を合せ拝み）有難う存じます、南無薬師瑠璃光如来、お庇陰を以ちまして両眼とも明かになりました、誠に有難う存じます……。成程ウ是は手でございますか。×「然うよ。梅「へえ／＼巧く出来てゐますね。×「お前何うして眼が明いたんだ。梅「へえ実は二十一日断食をしました、一心が届いたものと見えます。×「ム、ウ、ま、此位な目出度い事はないぜ。梅「へえ誠に有難う存じます……。あなたは何方のお方で。×「フ、／＼何方だつて、お前毎日のやうに宅へ来てゐるぢやアねえか、大坂町の近江屋金兵衛だよ。梅「へえ、是は何うも誠にへえ、

……あなたは其様そのなお顔でございましたか。近江屋「フ、其様そのなお顔と云ふものもねえ
 もんぢやアねえか、何なににしても眼めの明あいたは共に悦よろこばしい、ま結けつ構こうな事で。梅「へえ有
 りりがたがたぞん
 難なんう存ぞんじます、毎度また御鼻ごび眞まになりまして……これは何なんです、一体たいにかう有あるのは…
 …。近江屋「成なる程ほどな、眼めのない人が始めて眼めの明あいた時には、何なん尺じやく何間なんげんが解わから
 ぬめさきさきで、眼めの前さきへ一たい体に物ものが見みえると云いふが、妙めうなものだね、是これは薬師やくしさまのお堂だうだよ。梅
 「へえ、お堂だうで、是これは……。近江屋「お賽さい銭箱せんばう。梅「成なる程ほど皆みなながお賽さい銭せんを上あげる
 んで手つを突つ込こんでも取とれないやうに…巧うまく出来できて居ゐますなア…あの向むかうに二つ吊ぶら下さがつて
 居ゐますのは…。近江屋「あれは提ちやう灯ちんよ。梅「家内かないなどが夜点よあけて歩あきますのは彼れでげ
 すか。近江屋「なに、それはもつと小さい丸まるいので、ぶら提灯ちやうちんといふのだが、あれは神しん
 前まへへ奉納ほうなふするので、周圀まはりを朱あかで塗ぬり潰つぶして、中なかへ墨くろで「魚うをがし」と書いてあるのだ、
 周圀まはりは真まツ赤あか中は真まツ黒くろ。梅「へえ、真まツ赤あか……真まツ黒くろ旨うまく名なけましたな、成なる程ほど真まツ赤あか
 らしい色で……彼れは。近江屋「彼家あれは宮松みやまつといふ茶屋ちややよ。梅「へえ……これは甃しきい
 石しでございませう。近江屋「おや、よく解わかつたね。梅「へえ是これは下駄げたを履はいて通とほると、
 がらゝ音がしますから解わかりますが、是これは盲まう人じんが歩あきいゝやうに何処どこへでも敷しいて有あ
 のでせう。近江屋「なアに社内しやないばかりだアね、そろゝ出掛でかけようか。梅「へえ有ありがたがた難なん

う存ぞんじます、只ただ今杖いまつゑを持つてまゐりませう。近「もう杖つゑも要いらねえから薬師やくしさまへ納をさめて往いきな。梅「へえ誠に有あり難がたう存ぞんじます……へえ、何どうも日本晴にっぽんばれがしたやうだてえのは、旦那だんなさま此この事でございませう、本ほん当あたに有あり難がたいことで。近「まア芽出度めでたかつた。梅「旦那だんな々々《《これは何なんでげす。近「生薬屋きぐすりやの看板かんばんだよ。梅「あれは……。近「糸屋いとやの看板かんばんだ。梅「へえ……あれは。近「人が見て笑つてるに、水菓子屋みづぐわしやだ。梅「へえ……あ彼処あそこに在ある円まるいものは何なんです、かう幾いくつも有あるのは。近「あれは密相みかんだ。梅「あの色は何なんと云いふんです。近「黄色きいろいてえのだ。梅「へえ……密相みかんには異ちがつたのが有ありますな、かう細長ほそながいやうな。近「フ、あれは乾柿ころがきだ。梅「乾柿ころがき、へえ、彼あれは。近「第一の銀行よ。梅「成程なるほど噂はさには聞をいて居りましたが立派りつぱなもんですな……あれは。近「橋だ、鎧よろひ橋はしといふのだ。梅「へえ、立派りつぱな物ものですな何どうも……あの向うへ往いきますのは女をんなぢやアございせんか。近「然さうよ。梅「へえ、女をんなてえものは綺麗きれいなものですな、男をとこが迷まよふな無理無理ありませんね。近「あれは何処どこかの権妻ごんさいだか奥さんだか知れんが、人柄ひとがらで別嬪べつぴんだのう。梅「へえ、綺麗きれいなもんですな、私わたし共どもの家内かないは、時々とき／＼わたくしあなたとこゝろ私わたしが貴方あなたの処ところへお療治れうちに参まゐつて居ゐると迎むかひに來きた事こともあります、私の女房わたしにようぼうは今いまのやうな好いい女をんなですか。近「ウフ、アハ、梅喜ばいきさん腹はらア立たつちやアいけないいよ、お

前まへん処とこのお内儀かみさんは失敬しつがいだが余あまり器量きりやうが好よくないよ。梅「へえ、何どんな工合ぐあひですな。
 近「フ、何どんな工合ぐあひだツて……あ彼処あそこへ味噌みそ澆こしを提さげて往いく何処どこかの雇やとひ女をんなが有あるね、
 彼あれよりは最もう少し色いろが黒くろくツて、ずんぐりしてえて好よくないよ。梅「彼あれより悪わるうございま
 すと、それは恐おそれ入いりましたな、私わたくしは美人びじんだと思おもつてましたが、器量きりやうの善よし悪あしは撫なたツ
 て解わかりません……あ……危あぶねなア、何なんですなア……是これは……。近「人力車じんりきだ。梅「へえ、
 眼めの見みえない中うちは却かへつて驚おどろきませんでした、何どうでも勝手かたにしねえと云いふ氣きが有ありました
 から、眼めが明あいたら何なんだか怖こはくツて些ちつとも歩あけません。近「それぢやア車くるまに乗のせよう、然さ
 うして浅草あさくさの觀音くわんおん音おんさまへ連つれて往ゆう。と是これから合乘あひのりで、藏前くらまへ通どほりから雷神門かみなりもん
 の際きはで車くるまを下おり、近「梅喜ばいきさん、是これが仲見世なかつみせだよ。梅「へえ、何処どこウ……。近「なアにさ、
 ここが觀音くわんおん音おんの仲見世なかつみせだ。梅「何かゞございませう玩具店おもちゃみせが。近「べた玩具店おもちゃみせだ。
 梅「どれが……。近「あの種々いろんなものを玩具おもちゃと云いふのだ。梅「へえ……種々いろんな物ものが有あ
 りますな、此このあひだ間やまだね山田やまださんの坊ちゃんぼつが持もつていらしたのを私わたしが握にぎつたら、玩具おもちゃ
 だと仰おつしやいました、成程なるほどさま／＼の物ものが有ありますよ、此方こつちも玩具おもちゃ……彼方あつちも玩
 具おもちゃ、其その隣となりも玩具おもちゃ、あゝ玩具おもちゃを引張ひつばつて伸のびて居をります。近「フ、あれは飴あめやだ
 よ。梅「へえ、成程なるほど、此方こつちは。近「人形屋にんぎやうや。梅「向むかうのは。近「料理茶屋れうりぢややまんばい萬梅あめとい

ふのだ。梅「あらく」。近「見ともねえなア、大きな声であらあらと云ひなさんな。梅「あれは。近「絵草紙だよ。梅「へえ、綺麗なものですな、撫て見ちやア解りませんが、此間池田さんのお嬢さまが、是は絵だと仰しやいましたか解りませんでした。梅「お、突当りやがつて、気を附けろい、盲人に突当る奴が有るかい。近「眼が明いて居るぢやアないか。梅「へ、今日明きましたんで、不断云ひ慣けて居るもんですから。と云ひながら両手を合せ、梅「南無大慈大悲の観世音菩薩……いやア巨きなもんですな、人が盲目だと思つて欺すんです、浅草の観音さまは一寸八分だつて、虚言ばかり、巨きなもんですな。近「そりやア仁王門だ、是から観音さまのお堂だ。梅「道理で巨きいと思ひました……あゝ……危い。と驚いて飛下る。近「フ、何だい、見ともない、鳩があるんだ。梅「へえ、豆をやるのは是ですか……鳩がお辞儀をして居ますよ。近「なに豆を喰つてゐるんだ。梅「異つたのが居りますね、頭の赤い。近「あれは鶏鳥だ……ま此方へお出で、こゝがお堂だ。梅「へえ、成程、十八間四面とは聞いてゐましたが、立派なものですな。近「此の段々を昇るんだ。梅「へえ何だか何うも滅茶でけすな……おゝゝ大層絵双紙が献つてゐますな。近「額だアな、此方へお出で、こゝで抹香を供るんだ、是がお堂だよ。梅「へえ、是が観音さまで……これは何で。近

「お賽銭箱だ。梅「成程先刻も薬師さまで見ましたが、薬師さまより観音さまの
 方が工面が宜いと見えてお賽銭箱が大きい……南無大慈大悲の観世音菩薩、今日図ら
 ず両眼明かに相成りましてございます、誠に有難き仕合に存じます……。近「梅
 喜さん、此方へお出でよ。梅「へえ……こゝに大層人が立つてゐますな。近「なに彼りや
 ア此方の人が映るんだ、向うに大きな姿見が立つてゐるのさ。梅「此方の人が向うへ……
 ……(前後を見返り)え成程近江屋さん貴方が向うに立つてゐますな、成程能く似てゐ
 ますこと。近「似てゐる筈よ、鏡へ映るんだから、並んで見えるだらう。梅「私は何方で
 近「何方だツて二人並んで居るだらう。梅「へえ……。首を動かし見て、「成程此方で
 首を振るやうに向うでも振り、舌を出せば彼方でも出しますな。近「止しねえ、見ともね
 えから。梅「ム、ウ私は随分好い男ですな。近「ウン……。梅「私は此の位な器量を
 持つてゐながら、家内は鎧橋で味噌漉を提げて往つた下婢より悪いとは、ちよいと鬱
 ぎますなア。近「其様なことを云つたつて為やうがない、さアこゝは奥山だ。梅「へえ
 ……。ときよろ／＼してゐる中に、近江屋の旦那を見失つてしまひました。梅「金兵衛さ
 アン……近江屋さアン……。と大きな声を出して山中呶鳴り歩きます中に、田圃の出口
 の掛茶屋に腰を掛けて居ました女は芳町辺の芸妓と見えて、お参りに來たのだから

ら余り好い装では有りません、南部の藍の萬筋の小袖に、黒縮緬の羽織、唐繻子の
 帯を〆《し》め、小さい絹張の蝙蝠傘を傍に置き、後丸ののめりに本天の鼻緒の
 すがつた駒下駄を履いた小粋な婦人が、女「ちよいと梅喜さん、ちよいと。梅「へえへえ
 何処ウ……（彼方此方を見廻す）女「何だよう、私が先刻から見てみると、お前がこゝを
 往つたり来たりしてえるが、眼が開いて居るから能く似た人が有ると思つてゐたら、矢
 張梅喜さんなんだよ、ま何うしたえ。梅「へえ、今日眼が開きました。女「眼が開いた
 え……だから馬鹿には出来ないものだよ、本当に神さまの御利益だよ、併しまア見違へ
 るやうな好い男になつたよ。梅「へえ、あなたは何処のお方で。女「いやだよ、大概声
 でも知れさうなもんだアね、小春だよ。梅「え……小春姐さんで、成程……美しいも
 んですなア。小春「いやだよ、大概におし。梅「へへへ、お初にお目に懸りました。小春
 「何だね、お初うなんて。梅「いえ、お顔を見るのはお初ウで。小春「お前は眼が開いて
 ちよいと子柄を上げたよ、本當にまア見違ひちまつたよ、一人で来たのかい、なに近江
 屋の旦那を、ム、失れて、然うかい、ぢやア何処かで御飯を食べたいが、惣ざい料理もご
 たくするし、重りする処も忌だし、あゝ釣堀の師匠の処へ往かうぢやアないか。梅
 「へえゝ釣堀さまとは。小「何だね釣堀だね。梅「有難い……私は二十一日御飯を

食たべないので、腹はらの空へつたのが通とほり過すぎた位くらゐなので、小「ぢやア合あひ乗りで往ゆかう。と是これか
 ら釣つり堀ぼりへまゐりますと、男なん女にょの二ふたり人づれ連れゆゑ先せん方ぱうでも氣きを利きかして小間こまへ通とほして、
 蜆しじみのお汁つけ、お芋いものにつころ 転ころがしで一いつちよこ猪口ちよこ出でました。小「さ、お喫たべよ、お前まへの目めが開あいて
 芽出度めでたいからお祝いはひだよ、私わたしがお酌しやくをして上あげよう……お猪口ちよこは其処そこに有あらね。梅「へ
 え、是これがお猪口ちよこ……ウンナ……手もちつには持も慣なけて居ゐますが、巧うまく出で来きてゐるもんですな、へ、
 、是これはお徳利、成程なるほど此こ中なかからお酒さけが出でるんで、面おも白しろいもんですな。小「何なんだよ、
 猪口ちよこの中へ指つまを突つつ込こんでサ、もう眼めが開あいて居ゐるから、お酒さけの覆ふれる氣遣きづかひはないは。
 梅「へ、不ふ断だんやりつてゐるもんですから……（一口くちの飲のんで猪口ちよこを下したに置き）有あり難がたう存ぞん
 じます、どうも……。小「冷さめない中うちにお吸すひよ、お椀わんを。梅「へえ是これがお椀わんで……お箸はしは
 ……これですか、成程なるほど巧うまく出で来きて居ゐますな……ズル／＼ズル／＼（汁このひとを吸しづみふ音かひ）ウン結け
 構つこうでございます……が、どうも力かた堅かくつて……。小「ホ、いやだよ此このひと人は、蜆しじみの貝かひこ
 と食たべてさ……あれさお刺身さしみをおかつこみでないよ。梅「へえ……あゝ好いい心こころ持もちにな
 った。と漸だん／＼々さかづき 盞さんがまはつて参まゐるに従したがつて、二人とも眼めの縁ふちほんのり桜さくら色いろとなりま
 した。小「梅喜ばいきさん、本ほん当たうにお前まへ男をとこ 振ふりを上あげたよ。梅「へえ私わたしは随ず分ぶん好いい男をとこで、
 先さつ刻さく鏡きやうでよく見みましたが。小「お前まへに去き年ね私わたしが寸白すばで引ひいてゐる時じ分ぶん、宅うちへ療れう治ちに來きた

に、梅喜さんの療治は下手だが、何処か親切で彼様な実の有る人はないツて、宅の小梅が大変お前に岡惚れをしてゐたよ、あれで眼が有つたら何うだらうと云つたが、眼が開いたから誰でも惚れるよ、私は本当に岡惚れをしたワ。梅「えへへへ、冗談云つちやアいけません、盲人にからかつちやア困ります。小「盲目だつて眼が開いたぢやアないか、冗談なしに月々一度位づゝ遊んでおくれな、え梅喜さん。梅「あなた、そりやア本当でげすかい。小「本当にも嘘にも女の口から此様なことを云ひ出すからにやア一生懸命だよ。梅「え……本当なれば私ア嬬を追ひ出しちまひます、へえ鰐橋の味噌漉提げより醜いてえひどい顔で、直ぐにさらけだしちまひます、あなたと三日でも宜いから一緒に成り度いね。と云つて居りますと、突然後の襖をがらりと開けて這入つて来た婦人が怒りの声にて、婦人「何だとな。梅「え……何処の人だえ。婦人「何処の人だつて、お前の女房のお竹だよ。梅「お竹え……是はどうも……。竹「何だとな、今聞いてゐれば、彼奴の顔は此んなだとか彼んなだとかでいけないから、さらけだしてしまひ、小春姐さんと夫婦に成らうと宜く云つたな、お前其様なことが云はれた義理かえ、岩田屋の旦那に連れられて浜へ往つて、松さんと喧嘩アして歸つて来た時に何とお云ひだえ、あゝ口惜しい、真実の兄弟にまで置去りにされるのも己の眼が悪いばかりだ、お竹や何卒一

方^たでも宜^いいから明^あけてくれ、どうかエ然^{さう}して薄^{うす}くも見^みえるやうにして呉^くれと云^いふから、
 私^{わたし}も医^い者^{しや}ぢやアなし、お前^{まへ}の眼^めを明^あけやうはないが、夫^{それ}程^{ほど}に思^{おも}ふなら定^{さだ}めし口^く惜^やしかつ
 たらう、何^どうかして薄^{うす}くとも見^みえるやうにして上^あげたいと思^{おも}つて、茅^{かや}場^ば町^{ちやう}の薬^{やく}師^しさまへ
 願^{ぐわん}掛^がけをして、私^{わたし}は手^て探^{さぐ}りでも御^ご飯^{ぜん}ぐらゐは炊^たけますから、私^{わたし}の眼^めを潰^{つぶ}しても梅^{ばい}喜^きさん
 の眼^めを明^あけて下^{くだ}さるやう、御^ご利^り益^{やく}を偏^{ひと}へに願^{ぐわん}ひますと無^む理^りな願^{ぐわん}掛^がけをして、寿^{じゆ}命^{めい}を
 三^{さん}年^{ねん}縮^{ちゆ}めたので、お前^{まへ}の眼^めが開^あいたのは二^に十^{じゆ}一^{いち}日^{にち}目^めの満^{まん}願^{ぐわん}ぢやアないか、私^{わたし}は今^{いま}朝^{あさ}眼^{がん}
 が覺^さめてふと見^みると、四^あ辺^{あたり}が見^みえないんだよ、はてな……私^{わたし}の眼^めが潰^{つぶ}れたか知^しらん、私^{わたし}が
 見^みえなければきつと梅^{ばい}喜^きさん^の眼^めが開^あいたらう、それとも無^む理^りな願^{ぐわん}掛^がけを為^したから私^{わたし}へ
 罰^{ばち}が中^{あた}つて眼^めが潰^{つぶ}れたのかと思^{おも}つて、おどくしてゐる所^{ところ}へ、近^あ江^{ふみ}屋^やの旦^{だん}那^なが帰^{かへ}つて来^きて、
 梅^{ばい}喜^きの眼^めが開^あいたから浅^{あさ}草^{くさ}へ連^つれて往^いつたが、奥^{おく}山^{やま}で見^み失^はつたけれども、眼^めが開^あいた
 から別^{べつ}に負^け傷^がはないから安^あ心^{しん}して居^ゐなと云^いはれた時^{とき}には、私^{わたし}は本^{ほん}当^{たう}に飛^と立^だつ程^{ほど}に嬉^{うれ}しく、
 自^じ分^{ぶん}の眼^めが潰^{つぶ}れた事^{こと}も思^{おも}はないでサ、早^まくお前^{まへ}に遇^あつて此^{この}事^{こと}を聞^きかしたいと思^{おも}つたから、
 お前^{まへ}の空^{あき}杖^{づゑ}を突^ついて方^{はう}々^{／＼}探^{さが}して歩^あくと、彼^あ処^{そこ}の茶^{ちや}店^{てん}で稍^{やう}く釣^{つり}堀^{ぼり}へ往^いつたといふ事^{こと}
 が解^{わか}つたから、こゝへ来^きてもお前^{まへ}の女^{によう}房^{ぼう}とは云^いはない。只^{ただ}梅^{ばい}喜^きさん^に遇^あひたうござい
 ます。何^{どう}卒^{ぞつ}遇^あはしておくんないまし、私^{わたし}は女^{をんな}按^{あん}摩^まで療^{れう}治^ちにまゐりましたと云^いつたら、

按摩さんなら茲においで、今お酒が始まつて居るからと云ふので、私は次の間に居るとも知らず、お前は眼が開いたと思つて宜くのめのめと増長して私を出すと云つたね。梅喜は天窓を両手で押へ、梅「はあア誠に面目次第もない、お前が次の間に居やうとは知らず、誠に濟まない……。女房は暫く泣伏し涙を拭ひつゝ、竹「どうも本当に呆れちまつたね、私は死にます……。何を押へるんだ、放しておくれ。と止める手先を振切つて戸外へ出る途端に、感が悪いから池の中へずり陥りました。梅「おゝ……。お竹やゝ。竹「何だよ、しつかりお為よ、梅喜さんゝ、お起きよ。と揺り起され、欠伸をしながら手先を掻き、梅「ハア……。おや燈火を消したかえ。竹「何を云ふんだね、しつかりおしよ、お前何か夢でも見たのかえ、額へ汗をかいてゝさ。梅「へえゝ……。お前は誰だえ。竹「ホゝ、何だよ、お竹だアね。梅「こゝは釣堀かい。竹「何だね、宅に寐て居るんだよ、お前寐耄けたね、何うか夢でも見たんだよ。梅「あ……。夢かア、おやゝ盲人てえものは妙な者だなア、寐てゐる中には種々のものが見えたが、眼が醒めたら何も見えない。……。心眼と云ふお話でございます。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

心眼

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>